
白と黒～光と影～

如月夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と黒と光と影

【Nコード】

N6611I

【作者名】

如月夢幻

【あらすじ】

12年前、目の前で両親を殺され、それまでの記憶を失ってしまった春奈（18）はいままで前向きに生きてきた。

だがある日、親友の美月が事故にあってしまう。急いで病院にかけた春奈は

美月から

「私は命を狙われている。」

と告げられる。それ以後、美月から自分に関わるなと言われたが、

春奈は美月の
護衛をすると言いだして
。

序章「旅の始まりへ」（前書き）

この小説は投稿者の作ったオリジナル小説です。
内容がよく理解できない場合があります。

基本、戦闘などが多くなると思います。勿論、血などという言葉が出てきますので、そのような言葉が苦手な方は読むのをお勧めできません。ですが「グロ」くは無いと思います。
ですが途中からグロ要素が入る可能性は高いです。
ご注意ください。

序章 旅の始まりへ

幼女が見ていたのは、地獄絵図だった。薄闇のなか、真紅の血が壁にこべりついている。

そして、目の前に横たわる母の顔が脳裏に焼きついた。

「やだ・・・こんな・・・助けて・・・」

声にならないかすかな声で、幼女が、その一言を絞り出した。ふと、前をむくと黒い影が

走るのがみえたが、幼女に限界が達し、その場に倒れ伏した。

少女が見上げていたのは、満月だった。雲ひとつない空に、明るく帝都の下町を明るく

照らす。城から見たそんな日の景色は格別だった。夜になってなお、賑やかな歓声が

この街 テルフォントを明るく包み込む。

突然ドアを軽くたたいた音が少女 滝川美月の部屋に響いた。その音を認識すると、少女は

バルコニーを離れ、部屋の外に出て行った。

彼女の耳に入る音は、自分の荒い呼吸と容赦なく打つ雨の音だけだった。周りのものが、何で

騒いでいるのか、彼女 沢風春奈には、理解できなかった。それくらい周りのものが、春奈の

眼中には入っていないかった。

地面に溜まった水溜りを勢いよく蹴った。足が濡れてもお構いなしに、春奈は疾った。

春奈の脳裏に浮かぶのは、親友の微笑みだけだった

「美月っ！！」

病室のドアを容赦なく叩き開けたのは無論、春奈だった。そして、彼女の瞳は黒から白に塗りがえられたかの様に輝きを増し、大きく見開いた。彼女の眼に入った人物は、事故に遭いベットの上で呑気なあくびをしていた美月だった。彼女も眼を大きく見開く。

「春奈！なんで・・・。」

驚きを隠せない美月に春奈は大きく歩みより、

「なんで、じゃないでしょ！？ 無事なら連絡しなさいよ！本当に心配したんだから・・・」

怒りの声から、悲痛の声に変わった春奈をみつめた美月は、

「そっか・・・心配かけたね。ごめん・・・」

そんな暗い美月をみた春奈は

「暗くなっただって意味ないでしょ！？だから笑いなさい！！」

と、美月の顔を覗き込んだ。

（よく分かんない子・・・）

ふと、そんなことを思った美月だったが、仕方なく笑うことにした。

美月の微笑みを認識した

春奈は、思い切って話題に入ることにした。

「・・・ねえ美月。あんたなんで、事故なんかに遭ったの？あんた程の奴なら、事故なんかに遭わないでしょ??」

それを聞いた美月の顔が一変した。

たしかに美月は、運動神経抜群、それに加え頭も冴えている。もう

一つ気がかりなのが、美月

の傷が交通事故で負うような怪我でなないのだ。打撲、切り傷が美月の怪我だった。

美月の倒れてた場所が道路の真ん中という理由で、「交通事故」とすまされている。

美月は少しの間沈黙したままだったが、覚悟をきめ、春奈に向き合った。

「・・・確かに私は『事故』なんかにあってないわ。・・・だけど、色んな意味で事故ね。」

言葉を続ける。

「私は『命』を『狙われて』いる。」

一気にそこまで言うのと、大きくため息をもらした。ちらりと、春奈を見上げた。様子を伺ってる

らしい。当の春奈は呆然と立ちすくんで、絶望を見ている眼をしていた。やつとの事で口を開く。

「・・・本当に？そんな漫画の様な話を信じると？・・・嘘言わないで!？」

熱くなってる春奈に対し、美月は平然とした顔で

「私、嘘は苦手よ。・・・それとも、何？私を信用できないの？」

と、逆に問い返した。この質問には少し戸惑った春奈だったが、少し間を置いてから

「・・・そんなんじゃない。あたしはただ・・・信じられなくて・・・」

。続きを言おうとした春奈を、美月が遮った。

「『命』が狙われてること？」

春奈は自分が言おうとした事を見抜いた美月をじっとみつめ

「じゃあなんで、そんな平然としていられるの？」

「私を殺せやしないからよ。」

この言葉には流石に冷静にはなれない春奈は

「それってどういうことよ!？」

と少し声を張り上げ美月の顔を覗きこんだ。そして、一番聞きたかった事をきいてみた。

「あなた・・・何者なの？」

「・・・春奈には理解できそうにない事だけど・・・それでも聞く？」
こくり、と顔をさげる。その行動に承知した美月は、すべてを話し始めた。

「エルトラ・ユディース？」

聞いたことない言葉に春奈はつい、口にしてしまった。話を続ける美月は

「そう。その世界は現世の裏にある世界・・・現世が白なら、エルトラ・ユディースは黒ね。その世界は古い風習があつて、『光の子』『影の子』『月の子』っていう役割をきめて、光の子は現世におくつて、影の子は、テルフォント地下室に閉じ込め、月の子は、城に閉じ込める決まりがあるの。」

さらつとここまでいった美月は、さらに続ける

「でもね・・・一度だけでも、この風習を破つたら、世界は破滅の危機に陥るの。現世もテルフォントもみんな無くなる。でもね、こういう時こそ三つの力を合わせる必要があるの。・・・って大丈夫？」

話を中断したのは無理もない。春奈の眼が死んでいるのだから。春奈が口を開く。

「うん・・・ということ、現世に居る『光の子』を見つけないといけないんだね。」

と美月に聞く。あれだけの時間ですべてを理解している春奈に驚いているんだらう、美月は

「ええ・・・そう。だから私は光の子を見つけないといけないの。」
と、ため息まじりに言う。そんな美月に春奈は聞いてみた

「ねえ、その『光の子』をみつけないきゃいけないのは、分かったけど、それって誰かが風習

を破ったんだよね。誰なの？」

ストレートに聞かれ戸惑う美月だったが、承知し口を開いた。

「・・・影の子。彼女が風習を破ったのよ。6歳の時にね、地下室から脱走して・・・」

そこまで言うのと口を閉ざした。でも、次は明るく無理に口を開く。

「でもね、彼女は自分のせいだからって、私と一緒に探すことにしてくれたの。」

「へえ〜ちゃんと償いはするタチなのね。だけど、なんで探し出したのが今なの？」

不意に思ったことを口にした春奈に美月が微笑みながら、答えた。

「実は現世とテルフォントを結ぶ扉が開くのは、十二年に一回きりなの。丁度その時が、扉が開いてた時でね。しかも、二時間しか開かないんだよ！」

「そう、なんだ・・・。」

春奈が重たげに言う。そんな春奈が目に入らない美月がさらに続ける。

「そう・・・だから困ってるの・・・もう時間が無いのに・・・。」

と力なく言う。そんな美月を気遣い、春奈は

「思ってたんだけど、『影の子』って誰なの？あたしの知ってる人？」

水を向けられ、美月は

「ああ・・・言つとかないとね。一ノ川麗 私と一緒に転校してきたでしょ？あの子が、『影の子』」

ごく冷静に告げる美月に対し、春奈は大らかな、態度だった。

「へえ〜あの子がねえ。ま、確かに『影の子』って感じね。いつも冷静だし、頭いいし、

おまけに・・・ナイスバディだし。」

「まあ、城では栄養分の高い食べ物ばかり食べてたし、勉強も色

々やらされたわ。剣の稽古とかあったんだよ。」

とその日を思い出すかのように上目遣いに言う美月が続けた。

「さ、そろそろ帰りな。くれぐれも、このことを言うなよ……
っあー!!」

言い忘れてた……私、『月の子』は絶対殺されたりしないから、
それに……」

それはいい、と春奈は遮る。

「でも、大丈夫なの？ テルフォントに行く扉閉まってるでしょ？」
すかさず美月が言葉を挟む。

「私達がそんな馬鹿してこっちに来るとでも？ 実はもう一つ、テル
フォントに行くための

扉があるの。それは、光の子の力じゃないと開かないんだけどね。」
ほっ、としたように春奈は大きく胸を撫で下ろした。

「良かった……これで大丈夫……」

だね、という前に美月が口を開いた。

「大丈夫なわけないでしょ？」

「へ？」

間の抜けた声を出した春奈を襲ったものは……

「くしゅんっ!!」

くしゃみだった。そう、春奈はつぶ濡れになりながら、ここまでき
たのだ。風邪をひかないほうが不思議だ。そんな春奈を微笑みなが
ら見ていた美月は、

「ほら、これで体拭いて。あと寮についたら、ちゃんとお風呂はい
って暖かいもの食べて

寝るのよ。あと、タクシーで帰りなよ。私は今日中に寮に帰るつも
りだから。」

と色々言いながらタオルを手渡す。春奈は素直に

「うん……わかった。だから、早く帰っておいでよ!？」

「わかってるって。じゃね。」

と既に扉から出ようとしていた背中に声をかける。もう背中が見え

ない、と思ったその時
ひよこっ、と扉から春奈が顔を出した。そして最高の笑顔を見せ、それが終わると、身を翻し、その場を駆け出した。聞き馴染みのある足音だけが、その場に残った。

いつもの通学路、空を見上げてみる。眩しい。ふと、そんなことを思う。反射的に目を掠め、太陽の日差しを手で避ける。そんな時、「美月〜！！おっはようっ！」

と背後から春奈の声がした。春奈はこちらに手を振ると、駆け寄ってきた。そんな春奈に

美月も

「おはよう。」

と微笑みながら、かぶりをふる。あの・・・と美月が言いかけた時春奈が口を開いた

「ねえ美月、私美月の護衛してもいい？」

これには流石の美月も驚きに目を見開いたが、すぐさま反論した。

「なっ・・・何言ってるの！？それじゃ、春奈が危ないじゃない！それに、春奈が来たってどうにも・・・」

「だって、危険なのはみんな一緒よ？もしかしたら、そいつら美月とつるんで、私を狙うかもしれないでしょ？それにあたし、美月が思ってるほど弱くないわ。」

腰に手を当て、うんざりしながら言う春奈に言い返そうとした美月だが、（何言っても無駄そう・・・）と、すぐさま負けを認めこっぴつた。

「・・・分かったわ。でもちゃんと、私の言うこと聞くのよ！？分

「かった？」

「うん・・・！」

微笑みながら、春奈は素直に返事した。明るい声だけが、その場に響き渡った。

放課後、部活を終わらせ春奈は、美月と一緒に寮に帰ろうとした時、かすかな殺気を背後から感じられた。振り向きもせず、春奈の耳元に囁いた。

「・・・私達の背後に敵がいる。振り向かずに私についてきて。奴らは私達を殺す気よ。」

「・・・うん。」

驚いたが、相手に不審な動きを見せないように、先を行く美月の背中を追った。

人通りの少ない場所にきたかと思うと、廃墟が立ち並ぶ細い路地を曲がった。気がついたら、歩いていた美月だったがいつの間にか走っていた。息を切らしながら走っていた春奈に、美月は

「！ 危ないっ！」

身を翻した美月が春奈を腕を引っ張った。さっきまで春奈がいた場所にはナイフが刺さっていた。顔色変えた春奈だったが不意に頭上から声が聞こえた。

「あゝあ、避けられちゃったあゝ？」

反射的に上を見上げてみる。廃墟の屋上に三人の黒い影があった。その影が同時に地を蹴り、地上に飛び降りた。

「まさかこんな所に逃げ込んでくれるなんて超ラッキー 本っ当ありがとー？」

と先ほど頭上から聞こえた声の持ち主が可愛く言う。声から想像できる顔をしていて、右手に鞭を構え、右目の黒い眼帯には、ハート

の飾りが添えられ、髪をツインテールにした

少女が真ん中に立ち、左右にも少女がたっている。右の少女は、ロングな髪に切れ長の目が特徴だった。手に持っていたのは、体のまわりを覆う大きな曲刀だった。左側の少女は、先を軽くまいた髪にヘアバンド。武器は持つてなかったが、手には硬いアームスが装備されていた。

「ま、そっちの口は『おまけ』ってことで。んじゃあさっさと死んで？」

それを聞いた美月は、ふふっ、と急に笑い出した。

「あーはっはっは！！・・・あんたら、わたしらを殺す気満々だけど、んなこと絶対っ無理だから！？その前に・・・」

言葉が途切れる。どこから出したのだろう、美月は刀を握り、右にいた少女の攻撃を受け止めていた。その少女がにやりとし、口を開いた。

「・・・流石『月の子』・・・いいえ・・・『滝ノ内美花沙様』ね？」

「たき・・・の・うち・・・みかさ？」

聞いたことのない言葉に春奈はその言葉を呟く。それを聞いた眼帯少女が驚きとバカにするように言った。

「あら、おまけちゃんは知らないのお？テルフォントのお城のお姫様のことじゃない・・・」

目の前の・・・ね？」

これは、美月に聞くように言った。当の美月はへらっとして

「そっよ、私は月の子・・・滝ノ内美花沙よ！！」

語尾は力をこめ、目の前の敵を薙ぎ払う。少女は宙で回転し着地する。それまで黙っていた左側の少女が口を開いた。

「でも、三対一じゃ勝ち目無いんじゃない？潔く負けを認めて、死ねば？」

笑顔でそんなことをさらっと言った少女に向かって春奈は、皮肉をこめてこういった。

「三対一???よく見なよ。三対二でしょ?・・・それに喧嘩は大勢

の方が楽しいんじゃない？」

敵を仰ぐように言う春奈に美月は、反論する。

「なっ・・・バカ言ってるんじゃないわよっ！春奈はにげ・・・」
だって、と美月の言葉を遮った。

「いま、やらないときつと後悔するから・・・美月を守りたいんだもん。」

言葉が終わったと同時に、春奈の体を眩い光が、覆いつくした。

皆呆然と立ちすくみ、その光景を黙って見ていた。

光が輝きを増す。

「なっ何・・・！！」

何が起きたのか、全く整理できない春奈は、ただその言葉だけを繰り返し言った。そして、

光が最高頂に達するとそれは、蠟燭の火が消えたかのように辺りに飛び散る。光が消え、春奈の手に付けられていたのは、黒いグロブにブレスレット。真ん中には透き通る青色の水晶が埋め込まれていた。真っ先に春奈が口を開く。

「・・・何・・・これ・・・でもなんだか、力が溢れて・・・」

「春奈っ！きたよっ！！」

美月の横を通り過ぎた眼帯少女は春奈に近づいていた。高く鞭を掲げ

「おまけチャンは死んじやいなっ！！」

と暴言を吐いた。だが悲鳴を上げたのは

「きゃあっ！！！！」

鞭を掲げていた眼帯少女だった。春奈は少女の鞭を避け、素早く彼女の顔に手を叩きこんでいたのだ。

「アンツ！！！！」

二人の少女が同時にその名を口にした。どうやら、眼帯をしている

少女は、アン、というらしい。冷静に考えていた春奈に対し、右側に立っていた少女は、左にいた少女に向かって叫んだ。

「レンジ!!!あのおまけちゃんを、再生不能になるまで叩きのめすわよっ!!!」

「分かったわ!!!レイダっ!!!」

その言葉が合図に変わり、二人の少女は同時に地を蹴った。レンジと呼ばれた少女は、春奈に一気に詰めより、

「死ねっ!!!」

の一言を、拳を振り上げながら言った。春奈はそれも避け、レンジの後ろに回った。絶妙なタイミングで彼女の首に、打撃をくらわせた。

「っ!!!」

その攻撃で彼女の体は崩れるように倒れ伏した。それを見ることをしなかった春奈は背を振り返り、後ろにいたレイダに春奈が空中蹴りを炸裂させた。

「うっ!!!」

顎に当たった蹴りで宙を舞ったレイダに、さらに春奈は地を蹴った。上手く受け身をし、地に降り立ったレイダだったが、そこに春奈の肘が腹部めがけて打ち込まれる。

「かはっ!!!」

レイダが真紅の血を口から吐いてから、苦しそうに顔を歪め、手から武器が離れたかと思うと、そのまま倒れ伏した。

それまでの光景をみていた美月がゆっくりと、春奈に近づいた。

「.....あなただったのね、春奈。...いえ『光の子』」

「!!!.....なになに言い出すのよ、美月。冗談キツイって.....」

「冗談じゃないわ.....それに前、言わなかった？嘘は苦手だつて。」

それを言うと、急に春奈に背を向け、誰もいないはずの廃墟に声を張った。

「隠れてないでさっさと出ておいで。『影の子』さん。．．．ずくと見てたんでしょ？」

にやりと笑って空を見上げている美月につられるように春奈も空を見上げる。そこには、誰もいないはずだったが、ある一つの影を確認した。詳しくは分からないが、春奈たちと同じ制服を着ていた。風でなびかれた長い髪は星空の下、紫色の髪が鋭く輝いている。こちらを見ている蒼い瞳はなぜか、悲しげにみえた。そんな彼女は廃墟からこちらに向かって飛び降りた。月明かりが当たったそれは強く輝いた。足音なく着地すると 春奈に近寄った 一宮麗が背後にいる美月に話しかけた。

「．．．気配は消したつもりだったのだけれど 月の子は騙せないのね。．．．やっぱり

貴方が光の子だったのね。沢凧春奈。」

「えっ！！．．．どうしてあたしの名前知ってるの？自己紹介してないよね!？」

はじめは愕然としていた春奈だったが、今度は逆に春奈が問い返した。そんな春奈に対し

麗は、淡々とした穏やかな声で思い出すかのように口を開く。

「知ってるわよ。あの時と何も変わってないもの。．．．あの時、貴方はただ泣いていて、 ああ、強くなったのかな？あの時より。」

「あんたっ．．．何言ってるのよ!？」

非難の声をあげた春奈だったが、言葉をつづけた麗の言葉に失言した。

「あなた、過去の記憶がないんだって？それもそうよね．．．私が、あなたの親を殺したんだもの。」

「えっ．．．」

（殺した!？．．．麗があたしの親を!？．．．そっ．．．そんなこと出来るわけない!!だってあの時、あたしは六歳だったのよ．．．だから麗も六歳のはず．．．）

頭を抱えて考えていた春奈は、そこから先は意識が途絶え、膝をつ

き倒れた。

「ん・・・」

春奈が目をあけると辺りは真っ暗だった。ビルらしき物もなく静かな場所だったが、目の前には美月に麗、他にも二、三人の人が持っている明かりでそこまで確認できた。

「起きたのね、春奈。」

春奈の目ざめにいち早く気づいたのは、やはり美月だった。春奈のもとに近づくと腰を屈めた。かすかに痛む頭を押さえながら、美月に「ここ・・・どこ？」

と問いかけた。美月は微笑みながら立った美月はこう告げる。

「ここが前に言ったテルフォントに繋がるもう一つの扉・・・春奈にしか開けることができないう扉よ。」

「！」

大きく目を見開いた春奈は声を出すことさえ出来なかった。春奈の眼ざめに気付いた麗が

春奈に向って、冷たく言い放った

「やっと起きたの？ほら、さっさと立ってちょうだい。」

「あら、随分冷たい言葉ね。他に言い方があるんじゃないの？」
皮肉を言う口調に似ているが、それは確かに怒りの言葉だった。

「いいのよ美月・・・ごめん。もう大丈夫だから・・・」

と言うと、すっとその場に立ち上がる。別に疲れがあったというわけでもないのだ。ぐずぐずしてはいられない。早くしないと世界は破滅してしまうのだから。

「そう？全然大丈夫には見えないわよ？それより貴方、『光の子』
については知ってるの？」

麗に冷たく問われた春奈だが平然とこう言った。

「ええ。美月に事情は聞いたわ。それより早く『テルフォント』つて所に行きましょ？世界が破滅の危機を迎えるのでしょ？」

「っ！！・・・物覚えがいいのね。分かった、なら早くしましょ。」
初めて麗が笑う。いや、それは「微笑み」というべきか。いたずらっぽく春奈に向って微笑んで見せる。春奈もそれに連られて微笑み返した。

「うん！」

その場を駆けだし、麗の隣のに並ぶ。そして春奈の左に美月が並ぶ。その様子を見ていた麗が口を開く。

「じゃあ春奈・・・私と同じ格好をとって、こう唱えて。『我ら、罪を受け継ぐものなり。』

また、世界を救う光なりけり。そして汝、ここに誓いをたてる。そして我ら、世界の導き手となりける』」

「我ら、罪を受け継ぐものなり。また、世界を救う光なりけり。そして汝、ここに誓いをたてる。そして我ら、世界の導き手となりける。」

両手を前に出し、掌を重ね、唱える。すると春奈の掌中に聖なる光が収束し始めた。さらに麗が続ける。

「ここは貴方は言わなくていいわ。『我、影の子なり。手を汚す道を歩むものなり。だが汝、

我の同胞、光の子を支える役目・・・今、その誓い、ここに立てる。』」

さらに春奈の掌中に光が灯る。続けて美月が

「『我、月の子なり。民に安心と幸福を捧げるものなり。我役目、民を未来に導く栄光の光なり。今、その誓い、ここに立てる。』」
胸に手を当て、透き通った声で言う。また光が輝きを増す。麗が口を開く。

「春奈、こう唱えて。『我、光の子なり。全てのものに光を受け、世界を明るく照らすものなり。だが汝、影の子の力借り、世界の栄光を見届ける・・・今、その誓い、ここに立てる。』」

「我、光の子なり。全てのものに光を授け、世界を明るく照らすものなり。だが汝、影の子の力借り、世界の栄光を見届ける・・・今、その誓い、ここに立てる。」
すべて言い終わったその時、春奈の掌中の収束していた光が最高潮に達した。
輝きが増し、目を開けてはいられなくなる。

「ん・・・。」

おそろおそろ目を開けた春奈が目にしたものは。

「空間？」

そう。春奈の目の前にはぽっかりと空いたさまざまな色が混じった空間だった。だが邪悪な感じが一切しなく、青く澄んだその空間は神聖な空間に見えた。

「じゃあ、行く？」

春奈の顔色を窺っていた美月が優しく問いかける。それに答えるように春奈は笑いながら凜とした声で答えた。

「うん！！」

「・・・なんか春奈って変わってるわね。」

不意に麗がそう呟く。「なんで？」と聞き返す春奈に麗は答えてみせる。

「だって普通、こんな空間見て、おっとりする奴なんてそういないわよ。中がどうなってるのか知らないのに、よく物怖じしないわね。」

「それが、春奈っていう人間なのよ。」

春奈が何か言う前に、美月が自慢げに答える。「まあ、なんでもいいわ。」と呟く麗が言葉を続けた。

「じゃあ、行くわよ！」

「ええ。」

「うん！」

二人の声が重なる。そして三人は同時に地を蹴り、ぴよんと飛ぶ。そしてその空間へと吸い込まれるかのように、不思議な空間へと落ちて行った。

序章 旅の始まりへ (後書き)

ふいー

終わった〜^^:

さあ、これから色々なキャラが出てきます！
賑やかになることでしょう^^*

できれば早くupしたいと思っています。

旅の準備（前書き）

奇襲をなんとかした春奈と美月は、テルフォントにつながる扉に行き扉を開いた。

そして、旅のスタートラインに立つため
いざ、テルフォントへ。

旅の準備

「ここは……。」

あの空間を抜けて地上に降り立った春奈は、空を見上げる。不意に体のバランスが崩れ、よろめいたが、とっさに態勢を立て直す。きつと長い間、無重力空間的な場所を巡っていて、立つ感覚が鈍っていたのだろう。

(でも、あの空間気持ちよかったなあ。)

そんなことを考えていると、例の空間から美月と麗が出てくる。春奈同様、二人も足元をすくわれたようにふらつく。が、こちらも倒れないよう大勢を立て直した。二人に気付いた春奈が声をあげた。

「あつ！美月、麗！！」

「はあ、やっぱり慣れないや。……ああ、やっぱりこの空気は美味しいわね。」

美月が髪を結んでいた紐を解きながら言った。美しく輝く黒髪は風に逆らうことなく、美月の背中を流れている。微妙な光がより美月の髪を美しく引き立てている。

「ここは……帝都の森ね。ここは北だから、南に行けば城に行けるわね。」

麗が意外そうにそう呟く。きつと現世にはちゃんとした、こちらの世界に行くための扉が存在するが、ここテルフォントにはちゃんとした扉が無いのだろう。

「そうね……ちょっと運が悪かったわね。こんな所に出るなんてああ、早く城に戻って、城の主に知らせましょう。」

美月がささつと歩き出す。それに従って春奈と麗も歩き出した。

「ここが帝都？」

しばしの時間。無言で歩いていた春奈がそこから見える景色を見て

感嘆の声をあげた。森を抜けでた所の辺り、無人地帯のためか、そこから見える街のように土地が整っていない。

だが街の地面と比べると少し高い。そのお陰で街全体を見渡せるのだ。

「こんなに賑やかなのね。帝都って。」

春奈が春奈たちに尋ねる。それに答えたのは美月だった。

「ええそうよ。ここよりも南に位置する下町は賑やかで活気があつて楽しい所よ。」

「下町……」

聞きなれない言葉に春奈がその言葉を連呼した。美月が言うのだ。

きつと楽しくて、温かい所なのだろう。急に楽しい気持ちがかみ上げてくるのが自分でも分かった春奈がその場を駆けだしながら

「早く城に行こうっ！！！！」

「あつ、ちよ……場所分かってんの！？待ちなさいっ」

「ほんと……熱いのは専門外なだけだ。」

美月と麗もその場を駆け出す。そして一直線に城に向かって走り出した。2〜3mは軽くある崖を飛び降り、まともな道が無い所を駆けて行く

「はあつ、疲れた……」

一気に城の辺りまで走ってきた三人のうち春奈が不意に口を開く。息が乱れている美月がさかさず突っ込みをいれる。

「……ちよつと一番張り切ってた奴が何言ってるの。それにもう少しで城につくから、もうちよつとだけ頑張りなさい。」

「うん……」

荒い息を整えて膝をついていた手を膝から離す。そして頭上を見上げる。そこにあるのは

高くそびえ立つ城だった。この距離でこの高さだ。まじかで見たらきつともつと大きいのだろう。息が整った三人が同時に頷き合い、個々の意識を感じ合い再び城にむかって走り始めた。

しばらく走り北門から城の門を通ってから春奈は

「城ってこんなに大きいのね・・・想像以上のでかさよ。」

そこにそびえ立つ「それ」はもう一つの塊と表現しても過言じゃなかった。実際、そこにある塊はどれくらいの面積があるか、想像できたもんじゃない。それに警備の硬さもそれなりにあつて、そう簡単に侵入はできないものだった。

「じゃあ城の主に会いに行きましょう。きっと豪勢な食事を出してくれるわよ。」

美月が微笑みながら周囲に呼びかけた。

正門を通り、場内に足を踏み入れた。場内は春奈が想像していたものと全く異なつた。シャンデリアや赤い絨毯が敷き詰められてると考えてたがそれとは対照的にシンプルにまとめられてた。ただ、壁に神聖な絵が描かれていたり、理解できそうにない形に彫り込まれていた。それだけでも高級さが滲みでている。

あちこちをきよきよ見ていた春奈に美月は

「そっか。春奈は城に入るのは初めてだものね。でもそんなに辺りを見てると変人に思われるわよ?」

と試すように言う。それに、と美月は続ける。

「春奈は光の子なんだから・・・みんな歓迎してくれるわよ。」

「そうだけど、やっぱり城つてなると・・・ね?」

「落ち着いては居られないのね?」

これは美月ではなく麗が口にした。驚いていた春奈だが、はっと我に返りこくつ、と頷いてみせた。

「帝国皇帝候補、並びに『月の子』の滝川美月よ。通してもらえます? 『光の子』を見つけたと城の主に伝えたいの。」

美月が腕組をしながら一人の使いに命じる。要件を聞いた使いは一礼をし、すぐさまその場を駆けだす。そして春奈が美月に踏み込んだ。

「ねえ、さつきから気になってたんだけど……『城の主』って誰？」

「ああ……ま、会えば分かるわ。」

美月がまともに答えようとしないので春奈はそれ以上は問わなかった。するとさつきの使いが戻ってきた。そしてまた一礼するところ述べた。

「お待ちせしました。言われた通り、主様に要件をお伝えしました。今からお入りになってもいいようです。」

「分かったわ。ありがとう。」

「では失礼します。」

とだけ言い残すとまた一礼をし、その場を離れた。その背中を見届けていた美月が

「じゃ、謁見の間に行きましょう。」

とその場を離れた美月を追って春奈もそのあとを追った。

目の前には威圧感がある扉がそびえ立っていた。

「城の主、美月よ。光の子を連れ帰ったわよ。」

普段の淡々とした声で扉の向こうの城の主に話しかける。そして少し声が低い男の声が返ってきた。

「ふむ、聞いておる。入れ。」

「じゃあ失礼するわよ。さ、入って。」

美月に促され、春奈が開けてくれた扉の向こうに入る。そこにいたのは……

「?……誰もいないわよ?」

そうそこには影一つ見当たらない。気配も感じられないのもまた不思議だった。そこに美月が目の前にある神聖な壁に語りかけた。

「・・・久しぶりね。光の子を連れてきたわ。」

「えっ！？ちょ・・・これが『城の主』？」

春奈が口に手を当て美月に尋ねた。美月が答える代りに例の壁から声が返ってきた。

「その通り。我が子の世界、テルフォントが生まれた時からこの世界を見守る『城の主』じゃ。・・・光の子の波調を感じる。そなたが光の子か？」

「え、ええ・・・そうよ。」

姿がない相手に話すのが不思議なのか、春奈ははつきりとした言葉ではない言葉を返した。

そして美月がまた城の主に語りかける。

「ねえ、彼は呼ばなくても大丈夫なのかしら？呼んだ方が・・・」

「俺の事、呼んだか？」

「っ！！」

即座に春奈はその場を蹴り、後方へと飛びすさった。一方で美月は驚愕の表情を見せた。そこに映っていたのは

「フランっ！？あんた、いつの間に・・・っていつかいつの間に・・・」

美月が言うフランは、金髪の長い髪をヘアバンドで持ち上げ、澄んだ青い瞳が印象的な青年だった。年齢はせいぜい二十歳くらいだろう、その青年は美月の問いに飄々と答えてみせた。

「いつからって・・・初めっからだよ。護衛の騎士が美月らが帰ってきたって教えてくれたからな。んで尾行してたんだけど・・・相変わらず隙だらけだな。城の中だからって油断しては駄目だぜ？」

試すように言われた美月が食ってかかるような勢いでフランに言い返す。

「だからって尾行する必要ないでしょ！？ちゃんと言いなさいよ！」

「・・・美月？」

春奈が問う。いつもの彼女らしくないので言ってみただ。すると美月はハッと我に返り

咳払いする。

「・・・ん、ごほつ。・・・ごめん。で、城の主、これからどう動いたらいいかしら?」

「ではまず、戦力上げのために・・・そうだな。『ディール』を連れて来てこい。」

(・・・ディール?)

流石に春奈の頭の中が混乱する。フランといい、ディールといい、聞きなれない人物の名前に目が回りそうだった。

(ディールって男の名前? 戦力上げるために連れて来いっていうんなら大した強さなのよね、ディールって人。つか私らだけじゃダメなんだ・・・)

「・・・な・・・春奈っ!!!」

「!!!っえ、あ、・・・えと何!?!」

春奈が考え事をしている間にそっちはそっちで話をつけていた様子だった。そんな春奈を呆れたような声で美月が言った。

「はあ、つたく・・・えつとね、ディールを連れ出すために私ら、下町に行くから・・・」

「下町に行くの!?!」

食ってかかる春奈に美月がぎこちなく答える。

「え、ええ・・・だから春奈も行く?」

「行くっ!!!」

もうその場に地響きが起こりそうな声で答えた。流石にフランも口を挟んだ。

「なんか・・・俺の想像してた光の子とは程遠いな・・・」

「でしょ?」

麗がフランに相槌を打った。そして麗は踵を返し、

「じゃあ私は部屋で休むとするから。ディール探し、よろしくね。」
とたげ言い残してその場を去った。そして美月が春奈とフランに呼びかける。

「さ、私たちはディール探しに行こ! 多分今の時間ならきつと中央

の噴水にいるはずよ。」

「うん」

「了解」

二人も合図を送りその場を駆け出した。そして春奈は初めての下町へ。

「ここが下町・・・」

下町に降りるための階段を降りる前に、春奈が口を開いた。そこからは下町全体を見下ろせて、そこからは大きな歓声が聞こえてくる。まるで下町が大きな街みたいだ。そんなことを思っていた春奈だったが、不意に美月が口を開いた。

「じゃあ早速下町に降りてみましょう。降りたところに噴水があるから。」

「んじゃ、行くか！」

フランが右手で拳を作り左手にバチンツと当てた。ちょっとおかしな仕草にくすり、と春奈が笑って見せた。そんな春奈にフランが問うた。

「？なんで笑うんだ？」

「あ、えと・・・なんか今から喧嘩をしに行くみたいに見えるから。だからちよつと、ね？」

顔を赤めた春奈に逆に問われてビックリしたフランが今度はニツと笑って見せる。

「お？なんだ？俺に惚れてんのかぁ！？・・・悪いけど俺には心に決めた一人の女が・・・」

「ごふっ！！」

不意にフランの声の調子が変わった。変わった原因を作ったのは美月だった。見てみると美月が華麗に左足を高く上げ、フランの顎を捉えていた。そのままフランは後方にしりもちついた。そして美月が

足を下ろしこう言った。

「今はそんなこと言ってる場合じゃないわよ。ほら、さっさとディールを連れてくるわよ。」

声は落ち着いていたが、明らかに怒りが灯った声を発した。そしてまたフランが無駄口を叩く。

「それは分かったけど・・・美月お前、さっき『パンツ』もろ見えだったぜ？んーと柄は

スト・・・がふっ!!」

またもや美月の華麗な足がフランの脳天へと振り落とされる。フランは地面へ顔を、もろにぶつけた。そして美月がまた制裁の言葉を下す。

「よかったわね〜お姫様の下着を拝めて・・・んじゃ行くわよ。」
美月が踵を返しその場を離れる。

(・・・フランって女好き？美月も・・・すごいわね・・・)

そんなことは口にしなかった春奈も美月を後を追った。

「・・・いないわね。」

そんなことを口にしたのは一行が中央にある噴水へと辿り着いた時だった。そしてフランも疑問を口にした。

「確かにな・・・いつもこの時間帯、あいつはここで空を見てんのかな。」

フランがユーリの代わりにその「空」を見上げていた。そこで美月が提案する。

「じゃあ下の方まで見に行ってみない？もしかしたら宿屋の酒場に
いるかもしれないわ。」

「それいいな。んじゃ行ってみるか。春奈もそれでいいか？」

フランが春奈に問う。春奈もすぐにそれに賛同した。そして一行はそのまま、また下へと下って行った。

「わあ！すごい賑やか!」

あちらこちら見渡していた春奈が美月たちに向き合う。

「私、下町のこういう雰囲気好き！なんだかすごく楽しいっ！」

「そ、そう・・・？私にあんまり・・・」

と言いかけた時。ふと春奈の背中に声が降ってきた。

「泥棒　　！！！」

中年のおばさんの声だった。「泥棒」という言葉に一行はハッと振り返る。そこには紙袋を小脇に抱えた一人の青年がいた。頭にバンダナを巻いていて右手にはナイフを持っていた。それを見たフランと美月はさつと横に飛んで避ける。そしてフランは自分の腰にさしていた刀の柄に手をかける。が、ハッとフランは我に返る。自分たちは避けられたが、春奈の周りにはまだ人が沢山いて避けれる状態ではなかった。

(しまった　　っ！！)

青年が春奈にナイフを突き立てると同時に暴言を吐き捨てた。

「どけえー！！！」

(　このままじゃ)

春奈はとつさに拳を作り相手に振ろうとしたその時

「きゃっ!?!」

非難の声を発した春奈は誰かにより後方へと吹き飛ばされてしまう。

そして春奈の横を黒い影が奔った。そして

「っ！！！！」

青年は声にはならない声を発してその場に崩れ墮ちる。無論、死んだわけじゃない。気絶しただけだろう。

おそろおそろ春奈は頭上を見上げてみた。そこにいたのは黒髪長髪で意志の強い紫がかった目を持った若い青年だった。そして髪の色に似ている衣服はすこし胸元をだけさせている。その青年の手には一本の刀が握られていた。

そしてその青年は春奈に手を差しのばした。

「悪い。突然吹き飛ばして・・・大丈夫か？」

声に少し色気が含まれていたがそんなものには気がつかない春奈はそ

の手を取った。

「ええ、大丈夫・・・ありがとう。」

にこつと微笑んで見せる。そしてその手を借りその場に立ち上がる。そこに

「デイル！！」

「ん？フラン・・・それに美月か？」

春奈に近づいてくる二人はその名を呼んだ。思わず春奈もすつ頓狂な声をあげた。

「え！？・・・じゃああなたが・・・デイルさん？」

「あ？ああ・・・そうだけど。」

春奈が想像していた人物とは全く異なつた人物だった。もつと筋肉隆々のパワーファイターだと思つていたが、こんなにもほつそりとした人物だったとは・・・

春奈に近づいてきた美月がデイルに話しかける。

「流石デイルね。あんな奴を一発でとめちゃうなんて。」

「何、ただ気絶させたただけだろ？あんなの抑えるのなんて簡単だつて。で？お前が帰ってきた、って事は『光の子』って奴は見つかったんだな？」

試すように言つたデイルにフランが質問をする。

「んじゃあ聞くけども・・・光の子ってどんな子だと思つ？」

「あ？なんでそんなこと・・・まいつか。そうだな・・・誠実で物静かな奴なんじゃねえの？」

その答えにフランが「プツ」つと笑つ。そして呆れたように美月が答えてみせた。

「残念ね・・・実はあんたが助けたその子が『光の子』なのよ。」

「！」

やはりびっくりしたのだらう。だがそれは一瞬の事でちらつと、春奈に目をやる。そして美月にこつ言つた。

「人違い、つてわけじゃないんだな・・・んで、俺に何かようか？」

目は明後日の方向に向けて美月に問う。美月はこくりと頷き口を開

いた。

「城の主が呼んでるの。多分世界を正す旅に同行をお願いしたいんでしようけど・・・どう？」

来てくれる？」

(世界を正す旅・・・)

春奈が心の中で呟くと次はディールが口を開いた。

「分かった。じゃあ城に行こうぜ。」

「ほんっと、ノリがいいのな。」

フランが笑いかける。ディールもそれに答えるように微笑んでみせた。

「お互い様だ。」

「んじゃあ城に戻るわよ・・・って春奈、何処いつてんの？」

美月がどこかへ行くこうとしていた春奈を呼び止める。くるっと振り返った春奈が口を開く。

「だって私、まだ下町全然みてない・・・」

美月が言おうとしていた言葉をディールが受け取って春奈に言う。

「春奈・・・だっけか。さっきお前が狙われたのは、たまたまじゃ無いんだぜ？その格好、

なんとかしたほうがいいんじゃない？」

そして春奈は自分の制服とフランやディールらが来ている服を見比べた。確かに全く違うように思える。この世界ではこの服はおかしいのだろう。春奈が答えるより先に美月が答えた。

「あ、私も制服のままだ・・・はやく帰りましょ？下町はまた明日みに来ればいいんじゃない？」

「そうね・・・じゃあ城に帰ろう！..」

とっさに春奈がその場を駈け出す。すごい速さで元来た道を駈けて行く。そんな光景を見ていたディールがフランに囁いた。

「・・・やっぱ人違いなんじゃねえの？落ち着き全くねえぞ？」

「だろ？」

おかしいようにフランが笑った。そして美月らも春奈に続いて走っ

ていった。

「城の主、お望み通りデイルを連れてきたわよ。」

あの後、春奈ら一行は城に一直線に向かい、先程訪れた謁見の間に訪れたのだった。春奈が走り出したので一行は一度、中央の噴水のある場所に休憩して、さらに走り正直言つて

へトへトだったが、そんなことは無かったかのように口を開いた美月に少しビツクリした春奈ではあったが。

「・・・ふむ、確かに感じる・・・っ!?!?・・・どうなっている・・・」
突然の主の驚きに一行の空気が一変した。すぐさまフランとデイルが謁見の間の扉を開け、中に踏み込んだ。そして美月が主に問いかけた。

「どうしたというの!? 何があったの?」

だが主はその問いには答えずただ、1人言のように何度も呟く。

「・・・ありえない・・・我がおかしのか・・・だが何故に今まで気付かなかったのだ? やはり我も年をとったのだな。」

最後は笑いを含んだ主の声が聞けた。全くその状況を理解できない一行だったが不意にデイルが口を開いた。

「主、状況が全く読めねえ。一体どうしたんだよ?」

デイルの言葉を聞いた主が初めて言葉をかけられていたのを知ったかのように、こつ告げられる。

「おお、すまぬな。・・・では言おうか。光子の子、春奈と、そなたデイルの波長がシンクロしておる。」

「・・・え?」

「あ?」

「どういこと!?!?」

「おいおい・・・」

それぞれ言葉は違うがそれは驚きの言葉のなにものでもなかった。

特に春奈を除く全員が

驚愕に目を見開いた。そして美月とフランが抗議をする。

「でもそれって何億分の1の確率でしょ！？何かの間違いじゃないの!？」

「そうだけ。仮にもし、本当にそうだとしたら・・・」

フランが言葉に詰まる。不思議そうに春奈がフランを見たが答えない。代わりにディールがフランの言葉の続きを引き取った。

「・・・波長が一緒だと色々と危険が多いんだ。一般人なら大したことはないが、春奈みたいな特別な力を持った奴は別。力を使っても本来、春奈自身が疲労するが波長がシンクロしていると波長がシンクロしている奴に負担がかかるんだ。そもそもお前、波長がどういうものか知ってるか？」

問われた春奈は無論、首を横に振る。それを見た美月が今度は口を開いた。

「波長つていうのは、人の生命力の形が動く動作みたいなものなのだから戦う時も波長を使うし、だから春奈と同じ波長のディールにも負担がかかるの。」

「そんな・・・」

(ディールさんにまで・・・なんで彼を巻きこまなきゃならないの。)

口に手を当てそのままその場でしゃがみ込む。あまりにも急なこと。ただ、頭の中が絶望という文字で埋め尽くされるその時。

「ただ、ひとつだけ、ディールの負担を抑えられる方法がある。」

「なんですって?」

美月らが驚きに目を見開いた。無論春奈も閉じきっていた目を見開いた。

(抑える方法。)

考えるより先に体が動いていた春奈はその場に立ち主に向かって問いかけた。

「お願いっそれを教えて!!!なんだから!!!」

「では聞くがそなたは何故にそこまで必死になる？それを教えてみよう。」

「そんなの決まってる！！私の事なのに、他人を巻き込みたくないっ！！！！」

春奈の答えは決していた。はっきりと口を開き、主に訴えた。やや意外そうにデイルは春奈を見やったが、それに気づかない春奈は主が宿っている壁を睨みつけるように見た。主が話す。

「・・・なら言おう。気が進まないと思うがな。それは・・・『キスだ。』」

「……っ！！！！」

あまりにも突然の言葉だった。恋愛なんて全く経験したことのない春奈にいきなりの言葉だ。誰もが「できるわけではない。」と思ったその時。1人だけ動いた人物がいた。デイルだ。

彼は春奈の手をとり自分の方に引き寄せたかと思うと春奈の唇に自分の唇を落とした。

「っ！！！！」

「んっ！」

「……………」

啞然とした美月とフランだったが、それ以上に驚いたものが2人もいた。春奈とデイルだった。春奈がくぐもった声を上げたのにも関わらず、デイルはもつと深いキスを与える。

「んっ！！…ちょ…デイル…んんっ！！」

角度を変えて放たれるキス。抗議したが彼には全く聞こえていないようだ。

「ちょ…い…減に…しるおー！！！！」

右足を前に突き出すような蹴りをデイルにお見舞いする。見事にデイルは後方へと吹き飛ばされた。流石に春奈も我慢できなかったのかは分からないが無意識にデイルを蹴り飛ばした後、我に返る。

「あっ…ごめんなさい！！大丈夫！？」

あたふたしながらもディールに駆け寄った。しゃがみディールの顔を覗き込む。が、ハツと春奈は自分の唇に手を当てる。さつきまでキスをしていたのだと思い出すと顔が急に熱くなった。それに答えるようにディールは春奈を落ち着かせるために口を開いた。

「悪い、いきなりが駄目だったな。もう急にはしねえから。・・・つとそれより主。あなたの言った通り、負担は抑えられるようだぜ。」

ディールが立ちながらそんなことを口にした。

「ふむ。」

「なんでそんなことが分かるのよ？」

美月がディールに向かって問う。ディールは簡単に説明をし出した。「そりゃあな、お前ら・麗も入るけど、テルフォントに繋がる扉を開いただろ？つまりその時から春奈は力を使ってた、というワケだ。」

「だから既にディールには負担がかかってた、・・・そういうことか？」

フランが聞き返すとディールが「確信はなかったけどな。」と言葉を続ける。

「だからさつきキスしてみても確信が持てたんだ。春奈の口に触れたとたんに力が溢れるみてえに・・・なんつつか、その・・・まあ気持ちよかつたぜ。」

その言葉を聞いて春奈の顔がさらに熱くなるのが自分でも分かった。そんな春奈がディールに問う。

「・・・じゃあその時からディールさんは負担がかかってたの？どこも苦しく無かつた？」

流石にディールが目を見開いた。それも無理はないだろう。さつきはあんな力で蹴り飛ばしたのに今となつては逆にディールの体を気遣っている。そんな春奈にディールは淡々とした声で

「大丈夫だ。さつき回復したし、それに『ディール』でいいぜ？」

いつまでも「さん」づけをしていた春奈にそう言った。春奈も元気に答えて見せた。

「うん！」

そんな2人のやり取りを見ていた美月は主に向かってある提案をもちかける。

「ねえ、今日は疲れたから詳しい話はまた明日にしない？それに春奈には今から色々する事があるから。」

「え？」

春奈が聞いて見せるが今はだれも答えない。そして主も承知してくれたように、美月との会話も終わっていた。そして周りに呼びかける。

「んじゃあ春奈は今から服作る準備しないと、ね？フラン、ディール、よろしくね？」

「はいはい〜んじゃあ仕立て部屋に行くか？」

フランがそう言って、一行は謁見の間を後にした。

「あ、あのねディール。」

「ん？」

仕立て部屋に移動した一行の中のフランとディールはそれぞれ美月と春奈の体の大きさなどをメジャーで測っている所だった。春奈のサイズを測っていたディールに春奈が口を開く。

「あの・・・さつきはごめんね。いきなり蹴っちゃって。あれは、ただ恥ずかしかつただけで、別にディールが嫌いとか、そんなんじゃないから！・・・本当に負担がかかっているなら絶対にあんなことしないから。」

春奈のウエストを測っていたディールが「くくっ」と笑いだす。そしてついには

「・・・春奈、それってはっきり言えば俺の事が好きみたいに言ってるもんだぜ？」

「／／／／／／／／」

急に恥ずかしくなった春奈は顔を赤くする。そんな様子を見てから

また笑いだす。

「ははっ・・・ほんつと分かりやすいな、お前。」

「うっうっさい！」

両腕を掲げていた春奈はそれを振りおろそうかと考えたがそれは止めにした。それから、わいわいと楽しい会話をつづけていたのだが。

「おいディール！！サイズ測り終わったら、お前も服作るの手伝えよ！」

フランがディールにそう協力を求めたが当のディールは欠伸をしながら悪態をついた。

「はっ、下町の一一般市民を働かせようとはいいい御身分だな。それもどうせ、あのツンデレ

姫さんの頼みだろ？」

「ちよっ、ディール！手伝ってあげなよ。人出が足りないのかもしれないでしょ？だったら、ほら！」

春奈がディールの背中を力いっぱい押し、無理矢理あるかせた。そしてこう付け足す。

「私も手伝うから！！！」

「！・・・いや、いい。お前、こつちに来たばっかだから疲れてんだろ？だったら休めよ。途中で倒れられたら迷惑だしな。」

春奈の気遣いを断ったディールはそのままフランの後を追うように歩き始める。すると次は美月が春奈の前まで歩いて微笑みながら来てこういった。

「良かったわね。彼、春奈のことをちゃんと受け入れて、否定しなくて。」

「？どういうこと？」

意外な言葉に春奈が聞き返したら、美月がハツとした表情を見せる。そして口元に手を当てこういった。

「そうだった。春奈にはディールのこと話してなかったわね・・・彼、貴族とか腐った心とかを持つてる人が嫌いなよ・・・私の場

合、ちゃんとした心を持つてるって彼は知ってるから普通に接してくれるけど。」

「そう、だったの・・・でも私の場合、どうして受け入れてくれたんだろう。」

春奈が疑問を口にする。「多分、」と美月が微笑みながら春奈に答えた。

「春奈のまつすぐな心を知ってるから、かしらね？でも大分彼、春奈のこと受け入れてくれてるみたいよ。後、彼って素直じゃないけど、たまに素直なときがあるの。」

最後はからかいを含んで行って見る。すると春奈の心の中が渦巻く。(え・・・じゃあどれが本当で嘘か分かんない！)

先程キスをして「気持ち良かった」と言ったディール。じゃああれは本当なのか、嘘なのか分からなくなっている。そんなことは口にはしなかったが見て春奈の気持ちが手に取るように分かった美月は春奈にこう言い放った。

「ねえ、お腹空かない？そろそろご飯にしましょ？」

「あ、うん・・・」

ぎこちなく答える春奈にさらに付け加える。

「何、そんなに悩むことは無いわ。多分彼は春奈にあんまり嘘は言っていないわよ・・・私の見る限り、の話だけ。」

またまた茶化すように言ってくる美月を睨むように見た春奈はピイツとそつぽを向く。そんな春奈に美月が促す。

「ほら、さつさとご飯食べに行くわよ。あんな場所分かってんの？」

「あつ！！置いていかないで！！ちよつ・・・待ってっ！！」

慌ててその場を駆け出す春奈に美月は

(なんか忙しい子ね。)

口にはしなかったが、そんなことを思った。

春奈と美月はそれぞれ満足する程の食事を終え、春奈は美月に部屋をしてもらい、ベットに横になっている。

「・・・暇、なんか落ち着かないし・・・なにしよう。」

天井をボーッと見上げていた春奈はふと、あるところに目を走らせた。

「・・・バルコニー・・・？」

そう。そこには確かに広く開いたバルコニーがあった。春奈は横にしていた体を起こし、靴を履きなおし一直線にバルコニーに向かつて歩いた。外に出ると心地よい風が吹き抜けて、春奈の心の中の不安や苦しみが、風と共に散る。春奈は深く、深呼吸をしてみる。すると心の中が透き通っていくように心地よかった。そこから見える景色も絶品だ。夜でも活気のある下町の明るいライトが宝石のように輝き、活気ある声もうるさすぎなく、丁度よいくらいだ。

「気持ちいい・・・景色も綺麗で・・・何もかもが透き通っていきように感じる。」

素直な気持ちをそのまま口にした。「した」と言うより「したかった」のだが。

その景色に見とれていた春奈の背中にとある声が聞こえた。

「・・・春奈！？何やってんだ？」

「えっ!?!」

不意に言われ、思わず振り返った春奈の瞳に映ったのは、黒い長髪に黒っぽい衣服。勿論、

彼の事を知らない訳じゃない春奈は目の前にいる青年の名前を呼んだ。

「デイル!!なんでここに・・・」

「それはこっちのセリフだ。なんで春奈が俺の仮部屋にいんだよ?美月はどうした?」

デイルは呆れたような、別に分かっているのだが春奈に聞き返す。「だって、美月がここで寝ろつて。まさか美月がここがデイルの部屋って知らなかったのかな?」

春奈が不思議そうに顎に手をあて考え込む。

(・・・はめられたかな、と)

ディールが心の内側で呟いた。多分、美月が思いついた「性質」の悪い悪戯だろう。

今から新しい部屋を用意しろと言ってもきつと聞く耳無いだろう。別にそういう関係ではないというのに、本当に呆れる。それに俺は困りはしないが、あれだ。彼女は18歳で俺は21歳。恋人同士ならともかく春奈にとっては大人の男と寝るのは少し抵抗があるに違いないと思う。そして俺も彼女に気を遣うようにこう言った。

「んまあ、俺は外で寝るわ。お休み。」

「ちょ・・・外つて、まさか廊下!?!」

「あ?そうだけど・・・俺は別にどこでも寝られるし。なんなら春奈が外で寝るか?」

「そうじゃなくて・・・一緒に寝ようよ!」

「・・・は?」

何を言っているんだ、このお嬢さんは。俺に急にキスされたというのに警戒のひとつもすねればいいのに何故こうなんだろう。それに彼女は「一緒に」と言った。言い間違いも良いところだと思ふ。俺はその意味を知っているにも関わらず、こうからかってみる。

「へえ・・・じゃあ一緒にベットで添い寝でもしてくれんのか?」

別に俺はどっちでもいい。そのような事をするつもりはさらさらないのだから。

一方春奈は豆鉄砲を食らったみたいにして少しの間言葉を発せずじまつた。

「え・・・?・・・あつ!!違う!!そうじゃなくて、外じゃ風邪ひくからっ・・・」

やっとディールの言葉の意味が理解できた春奈は急激に顔を赤くさせ、誤解を解こうと説得する。そんな春奈をもつとからかうようにディールは顔に笑みを浮かべながら、いじめる。

「なんなら俺が添い寝してやろうか?けど俺なんかを傍に置いといて

たら大変なことになってるかもしれないねえぜ？例えば・・・朝起きたら裸、とか・・・」

「なっ・・・何言ってるのよっ／＼やめて！もう！！ディールのば・・・きゃあっ！！」

春奈の言葉が言い終わらないうちにディールは春奈を抱え、ベットに放り投げた。春奈は

とっさに起き上がるうとするが、ディールが春奈を口を押さえる形でまた横になる。

「んっ！！ちよ・・・」

また春奈の言葉を遮り、ディールが口を開く。

（しっ！静かにしろ・・・部屋の外に気配を感じる。多分美月だ。

お前は俺にキスされてるみてえな声出してる。）

「っ！！ちよ・・・なんで・・・」

（多分、俺らに変な期待をかけて盗み聞きだろ。だから、あいつらを騙してやるうぜ？）

ディールが春奈の口から手を外し言った。確かに外から人の気配を感じる。春奈もようやくディールの意図を理解してその場に起き上がり縦に首を振った。それをみたディールは、にやりと笑い、口を開いた。

「どうだよ春奈・・・気持ちいいだろ？ほら、もっと可愛い声で鳴いてみるよ？」

「ちよっ・・・やだっ！！っ・・・きゃあん！」

春奈もその気になったように上手に演技してみる。元々、こういうのが得意なんだろう、2人はそのまま演技を続ける。

「いいぜ・・・可愛い声で鳴くじゃねえか・・・そろそろ、か？」

「きゃあっ！！・・・はあ、はあ、・・・やああんっ！！」

あまりにもリアルな声真似に流石にディールが驚いたように春奈を見やる。春奈も口の端を軽く上げ、それに答える。次第に外の気配もさわわしているのにも気がつく。きつと美月はディールたちがそっちばかりに気がいって、自分の気配には気付いていないと思っ

ているのだろう。だからもつと慌てさせろつと春奈たちの演技にも拍車がかかる。

「っ……どうだよ。気持ちいいか？悪いけど俺はまだイってないぜ？」

「はぁんっ……んぁ！もうっ……だめえええ！！！！」

一層声を高くして発した声に答えるように、外にいる誰か（おそらく美月）の気配が薄れていった。それを確かめ合った春奈とディールは目を合わせ微笑み合い、ディールが手を挙げ、春奈も同じく手を挙げそれをパチツと叩き合わせた。いわゆるハイタッチだ。

「作戦成功ね！」

「だな。」

お互い笑いあつてディールがまた、からかう様に春奈に言つてみた「けど、春奈つて演技上手いんだな。あの美月をだませたんだぜ？それに俺自身も本当にしているみてえな気分になつたしな？」

語尾をはずませるように言ったディールに春奈は悪態をついた。

「うっ……ディールの意地悪っ／＼／＼！！」

「俺、別に意地悪言つたつもりはねえけどな？」

その言葉こそが意地悪だと分かっているディールがさらに春奈を茶化す。そんなディールに腹を立ててベットの上で暴れていた春奈がディールにさらに言いつける。

「もうっ！！出てっつて！！」

「おいおい、風邪ひくんじゃなかったのか？それに一応、ここは俺が美月から与えられた仮部屋なんだけど？」

そうなんだと思ひ春奈が周りに目をやる。確かに手入れも行届いているし、何よりも家具が男もので質素だ。そしてその質素なテーブルの上には酒が置いてあり、テーブルの近くにあつた椅子にはディールの様な背の高い人間じゃないと着れそうにない衣服がかけられている。その様子を見ていたディールが春奈に口を開いた。

「ま、こんな時間に女を追い出すみてえな根性の腐つた真似はしねえから。とにかく、春奈はベットで寝ろ。俺は床にでも寝るから。」

そういつとサツとディールはベットから降り、言った通り床に寝ころんだ。「あ」とディールが口を開く。

「あと、なるべく俺が寝てる時は動くなよ。反射的に殴りにかかるからな。」

「え……？そんな事言つといて、私が寝たところを襲つつもりじや……。」

「んな腐った事しねえよ。」

冗談で言つたつもりだがディールはそんな春奈に即答してきた。流石にビックリした春奈にディールがまた言葉をかけてきた。

「ほら、もう寝る。おやすみ。」

優しくそう言われ、春奈も心の底からにっこりと笑い返事を返す。

「おやすみ。」

騒がしい夜もこうして終わっていくのだった。

旅の準備（後書き）

もう文法滅茶苦茶な気がする^^^:

ぎりぎり、18禁は避けたぞ!!

多分大丈夫でしょ？

くだらない小説の拝見、有難う御座いました!!

スタートライン（前書き）

スタートラインに立つため、
春奈たちは旅の準備に取り掛かる。

スタートライン

「ん……」

バルコニーから差しこむ日差しに目を覚ました春奈は起き上がり、バルコニーに目をやった。うつすらと聞こえる下町の住人の声に加え、誰かがバルコニーに立っていた。

「起きたか。……にしても起きるの早いな。今まだ5時半だぞ。」

「デイル？ああ私、5時間くらい睡眠とればいいの。」

そこには朝日を浴びて綺麗に輝く黒髪をした青年　デイルが立っていた。青く透き通った青空の下、デイルの黒髪がより一層綺麗に見えた。その綺麗な黒髪を上下左右に揺らしながらデイルは春奈に近寄りながらこう言った。

「んじゃ、そろそろ美月たちの所に行くか？多分仕立てた服も出来上がってるだろうな。」

「うん、じゃ行こう！」

ぴよんとベットから降り脱いでいた靴を履き、デイルの部屋を後にした。

「あら、デイルに春奈、おはよう……。」

「おはよう美月！」

元気がない美月に対して春奈はその声の何十倍もの声で返事を返した。きつと昨日の芝居にまんまと引っ掛かっているのだろう。その様子を見ていたデイルが春奈の耳元で囁いた。

（「なあ、美月まんまと引っ掛かっているぜ。ちよつとやり過ぎたかも……」）

デイルが最後まで言い終わらないうちにフランがデイルの腕を引っ張り、自分の小脇に抱え、小さい声で怒りをみせた。

（「お前昨日外に誰もいないと思ってたんじゃないだろうな？いくら波長がシンクロしてるからって昨日会ったばかりの女性を襲うのはどうかと思うぞ。しかも春奈は18・・・」）

また言い終わらないうちに口を挟む者がいた。 美月だ。

「あー！！ちょっとフラン！何勝手に話進めてんのよ！！・・・んで、春奈。初めての体験はどうだった？」

フランの声が聞こえていたのか、美月は春奈に嬉々としながら春奈に問う。対照的に春奈は声を荒げた。

「なっ・・・ちよっ・・・何言ってるのよ！！っーかだいたい・・・」
春奈が言おうとした言葉を引き取ったディールが口を開いた。

「美月がわざと俺の部屋に春奈を入れたんだろ？そんな事されりゃ俺の理性も黙ってはくれないんでね。」

「なっ・・・お前は春奈を・・・やっぱり」

余計な事を言ったディールに食ってかかるようにフランが口を開いた。冗談だという事に気づかないフランは今ではディールの首を締めあげる勢いで腕に力を入れている。この状況で冗談をいったディールにも責任があるのだが。

そんな言葉の言い争いをしているところを春奈が止めさせる言葉を告げた。

「そんなことしてないわよ！あれは全部演技！」

「・・・え？」

ポツーンとする空気。流石に春奈もハッと息を飲んだ。昨日は美月達を騙すために行った演技なのにまさか、こんな形で真実を知られるとは。それに先程、美月は「どうだった？」という言葉で春奈に向けて言った。その言い方は好奇心からのものだとすぐに分かる。

美月が心底からガツカリするか、私とディールをフルポツコにするか。

一方でフランはあんなに焦っている。きっとこれは悪い薬になるのではないだろうか。それよりも何故にああも焦る必要があるのだろうか。

そんな疑問を解いてくれたのはディールだった。

「はぁ・・・なあフラン、お前昨日美月と一緒に俺達の声を盗み聞きしてたろ？」

「なっ・・・なんでそれを・・・」

フランが愕然とし、ディールを抱えていたフランの力が弱まった隙にディールはフランの小脇からするりと抜け出す。そしてまた口を開いた。

「お前は気配を消せていたけど、美月の気が俺や春奈にも分かったんだよ。気が隠せてないってこたあ俺らの事に夢中になってたって事だ。それはようするに美月の好奇心だ。もし仮に美月1人が盗み聞きしていたとする。逃げ出すほど衝撃的なもんだ。それを誰かに話すなんて事、美月はしねえ。これも俺の余談だが美月が盗み聞きしてる所をフランが見つけて一緒に盗み聞きする羽目になったんじゃないやねえの？」

そこまで聞いていた美月が苦笑いすると額に手をあてこう言った。

「・・・ほんと、凄いわね。ディールの言う通りよ。でもまさか、あれが演技だったなんて・・・不覚ね。」

「なんだ・・・そうだったのか。はは・・・悪かったな、ディール。」
安堵の息をもらしてからディールに謝る。きつとディールを思い切り締めあげたことの謝罪だろう。そんなフランに対してディールはごくあっさり

「んなの気にすんなって。」

と軽口をたたく。そしてディールは手の甲をフランに向けたままそれをフランの目の高さくらいに持ち上げた。ディールの意図を理解したフランは微笑みながらディールと同じように手の甲を向け、それを叩き合わせた。そこから掌を返して手と手を叩き合わせる。「パチッ」という軽やかな音がその場に響く。そして軽く笑って見せた。こうして見てみるとただの親友みたいに見える。

そんな光景を見守っていた春奈の耳元に美月が囁いた。

「実はね、フランとディールは親友なのよ。下町では結構有名なコ

ンビだったのよ。喧嘩の強さと絆の深さは世界一だって言われたし、城の中にいる私の耳にも届くほどね。」

「へえ・・・」

美月の耳にも届くくらいだ。本当に有名だったのだろう。さらに美月が付け足した。

「でもディールの両親はディールが物心つく前に事故で亡くなったのよ。なんかフランの母親とディールの母親が仲が良かったらしくってね。それでフランの母親がディールを引き取ったらしいわ。んで今の仲に至るのね。」

(・・・物心つく前に・・・可哀想。なんか私みたい・・・)

春奈が昔の事を思い出す。あの時の事は鮮明に覚えている。友達と遊んでいて、家に帰ったらそこは血の海と化していて・・・頭から血を流して横たわっている変わり果てた母の顔さえ覚えている。

記憶を失って尚、覚えていたことがこの日のことだけだ。

(・・・まさか麗がやったなんて・・・)

今になって思い出した過去

(！・・・なに考えてんの私は！！・・・そんなことは忘れて強く生きようって決めたんじゃない。・・・麗の事ももう忘れよう！！)

思い切り首を振って忘れようとした春奈の耳に聞こえたのは

「痛っ！！」

耳元ちかくで放たれた声。勿論春奈は知っていたが、いつの間にな近づいたんだろう。そこにいるのは顔を右手で覆ったディールだった。そして春奈に噛みつくような勢いで訴える。

「・・・春奈！！急に首振るんじゃないやねえよ！春奈の髪の毛が俺の目に当たって目が・・・

っ痛・・・」

「あっごめん！・・・大丈夫？」

あまりの考え事にディールの近づきに気付かなかった春奈がディールの顔を覗きこんだ。そして目を押さえている右手をのけてディール

ルの目を見る。余程痛かったのだらう、確かに右目は赤く充血して
いて少し潤んでいる。そんな春奈にディールは口の端を軽く上げ、
そのまま春奈の腕を引つ張り自分に近づけ、頭に手をまわしたかと
思うとそのまま春奈に口づけをした。いきなりの事に春奈も目を見
開く。一方、ディールは気持ちよさそうに深いキスを春奈に与えた。
そして間もなく唇を離れたディールが口を開いた。

「やっぱ治った！目が全然委痛くねえや。サンキュな、春奈。」

そんなことを言われた春奈が顔を真っ赤にしてディールに訴えた。

「なんでいきなりキスするのよ！ディール昨日、いきなりはしない
つて言っただばかりじゃん！馬鹿！！」

「いや・悪かった。けど、人の事を無視しといた挙句、目を痛め
てきたんだから、おあいこだらう？」

このディールの言葉で全てが理解できた。ディールは春奈に話かけ
たが、春奈は考え事していて聞こえてなく、近づいて話そうとした
のだ。そして運が悪く春奈の髪の毛の鞭を顔に喰らった・・・そういう
ことだろう。

「あ・・・そうだったの。ごめん・・・」

「おいおい・・・暗くなんなよ？別にいいって。元を言えば俺が悪い
んだしな。」

春奈が謝ればディールが軽く答えてくれた。その反応に春奈は胸を
撫で下ろした。そして軽く微笑んで、ありがとう、と言ってみる。
すると・・・

「ふふ・・・お熱いことぞ？」

美月が手でハートを作り、その中から春奈とディールを覗いている。
それはまさに好奇心旺盛な少女そのものだった。

がちゃ。

ドアが開く音にとっさに春奈たちがその先に目をやった。そこには
紫色の髪を無造作になびかせた麗が入ってきた。余分な布がついて
いない衣服を着ている。パンツに包まれた麗の足の綺麗さがより引
き立つスタイルだ。

麗はそのままカツカツと軽やかなブーツの音を響かせながら部屋の中に入った。春奈たちの姿を確認すると口を開いた。

「私は先に出るわね。昨日話した通り、私は先に手掛かりなんかを探すわ。有力な情報が見つかったら『ウォードン』に行くから。そこで落ち合いますよ。じゃ。」

それだけを言い残すと身を翻し部屋を後にした。真っ先に口を開いたのは春奈だった。

「昨日って・・・私がないうちに話し進めてたの？」

「ええ。前もってね。麗の仕事はすごく危険だから、その仕事は誰がするかって話をしただけよ。」

美月が軽く説明する。その言葉を聞いた春奈が顔を曇らせた。

「・・・麗、大丈夫かな。」

「大丈夫よ。麗ってすごく強いんだから・・・ね？」

美月が軽く微笑んで答えてみせた。その笑顔をみた春奈の顔が少し綻ぶ。美月が言うと本当に大丈夫な気がするのだ。

そんな所にフランが口を開いて見せた。

「さっ！麗が旅立った訳だし、俺らもそろそろ出発しねえか？ほら

！美月と春奈は俺らが作った服に着替えて。」

フランから受け取ったそれは頑丈そうな服だった。頑丈なものにもかかわらず、すごく軽い服は黒っぽい色をしていた。そして美月と春奈は着替えるため、部屋に用意されたカーテンロッカーに入ってしまった。

「着替えれたか？二人とも。」

「うん。」

「ええ。」

同時に声を発し、同時にカーテンを開けた二人は確かに着替えていた。

動きやすそうな服は肌の白い春奈に映えたスタイルだった。大胆な

ジャケットは膝を隠すくらいの長さで、足にはニーハイソックスという防寒対策も兼ねられていた。

一方、美月とは逆の色をした衣服を身にまとっていた。肩は動きやすいように肩を覆う布がなく、腕をまとう布が黒いのが映えてみえる。足元もあまり肌をさらけ出さないというスタイルが彼女らしい。「この服気に入った！私の好きなスタイルだし、なにより布が薄いのに暖かいもん。」

確かに春奈が身にまとっている衣服は胸を隠すだけの衣服の上にジヨケットだ。下はショートパンツという動き安さを意識したスタイルだ。

美月が口を開いた。

「すごいでしょ？この布はすごく貴重な動物から採れる毛を使っているのよ。だから薄着でも暖かいのよ。」

美月の優しい説明に春奈が「へえ。」と相槌をうつ。確かに肌触りもすごく良いと思ったりしながら春奈は服の生地を確かめている。そんな様子を見ていたディールが春奈たちを促した。

「んじゃ、服も着替えた事だし・・・そろそろ行くか？」

「あつ、ちよつと待って。」

歩き始めているディールを美月が止めた。すかさず口を開く。

「春奈、あなたってどんな戦い方できるの？」

突然の質問に春奈は目を見開くがすぐに顎に手を当て考えた。

「そうね・・・基本なんでもできるわ。主に剣道、ナギナタ、空手・・・かな？それがどうかしたの？」

それを聞いた美月がさつとドアに手を伸ばした。その行動を見て、フランとディールが美月に歩み寄り春奈を振り返る。それを見て尚、理解できない春奈にディールが口を開いた。

「武器なしでどう戦うんだ？」

「あつ！」

やっと美月の言いたいことが分かり、顔を輝かせた。そして美月を見つめる。美月も春奈を見つめ返して軽く微笑んだ。

「じゃ、武器庫に行きましょ？」
そう言っただアノブを捻った美月に続いた春奈たちは部屋を後にした。

「うわぁ〜いっぱい武器があるね。」

春奈があちらこちらと首を振りながら、その部屋にある武器を見た。剣や斧・・・種類豊富な武器が春奈の目に映る。

そんな春奈とは対照的に美月は立てかけている武器を手慣れた手つきでかき分けている。

「剣とナギナタか・・・一応どっちも持たせようか。それなら・・・これとこれかな？」

美月が選んだ剣とナギナタが春奈に手渡された。春奈がその武器を受け取り目を奔らせる。いたってシンプルに見えるが、それに使われている材料が高いものだと一目で分かった。

そしてもう一つのナギナタはコンパクトに仕舞えるのだろう、ナギナタの持ち手が折りたためるようになっていた。無論、こちらのナギナタも高級物だ。

「すごくいい材料を使ってるのね、この武器。」

「ええ、初代の武器たちにも勝る高級さよ。・・・本当は、初代が使っていた武器を持たせたいんだけど、すごく重いのよね。」

そんなものがあるんだ、心の中で春奈が呟いた。

そしてもう一度、武器に目を見やる。確かにものすごく軽いのに丈夫だ。これなら道中邪魔にはならないだろう。試しに軽く振ってみる。ビュンッと風邪を切り裂くような音が発生する。

「すごくいいわ。使いやすいし、邪魔にならない・・・」

呟くように言っただ春奈に美月も誇ったような顔を見せてから、自慢げに口を開いた。

「まあね。そのナギナタのデザインは私がしたのよ。便利でしょ？」

「へえ、そうなんだ！・・・すごい。」

流星は美月だな。そんなことを心の奥底で呟いてみる。

間合いを計っていたフランが美月に話しかけた。

「なあ美月。そろそろ出発しないか？」

「そうね。準備もできたところだし。じゃあ、出発する？」

美月は春奈とディールに振った。無論、答えは決まっていた。

「うん！」

「俺は元からその気だぜ？」

「じゃあ・・・出発しますか！」

「ああ！」

「うん！」

美月を除く3人の声が重なった。そして武器庫を後にする。

まずはスタートラインに立つため、

春奈たちは帝都を後にするのだった。

スタートライン（後書き）

更新すごく遅れました><:
ホント遅筆ですみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6611i/>

白と黒～光と影～

2010年10月9日22時43分発行